

# 1964年東京五輪・メダリストに聞く② 子どもたちがいたから頑張れた ママさんアスリートの 先駆者



1964年東京五輪  
「体操女子団体総合」銅メダル

## 小野清子さん(80歳)

フィギアスケートの安藤美姫選手やスピードスケートの岡崎朋美選手など、昨今では「ママさんアスリート」たちの活躍が増えているが、その先駆者が体操の小野清子さんだ。

小野さんは1960年のローマ五輪出場後、翌年に長女を出産。その直後、小野さんの出身地である秋田県から国体への出場要請を受ける。「国体が秋田で開催されるのに体操王国・秋田が勝たないわけにはいかないと言わねえ」と言っていると、平均台だけでもいいからと(笑)。でも、ほかの選手が頑張っているのに私だけ平均台というわけにはいかないし、桶のタガが外れるみたいに腰がガクガクしましたけど。なんとかなり切ったんですよ」

小野さんいわく、体操は技術的スポーツなので、一度覚えたことは筋力さえ戻ればできるのだとか。

「バスケットとか陸上とか走り回る競技だったら無理だったと思いますけど、平均台は1分ちよつとだし、床運動も踊りがメインですからね。ただ跳馬は床を蹴りあげる時、骨盤がグラついて大変で(笑)。周りからは、いい年して子どもを産んでまで逆立ちするなんて、と言われましたねえ」

「バスケットとか陸上とか走り回らないけれど、やらずに出来ないとは言えないなど。そう思って頑張っていると徐々に筋力が戻ってくるから不思議ですよ」

ところが、小野さん、わずか4か月の練習で見事、ウルトラCの復活を遂げるのだから、驚くばかりだ。「おかげでプラハの世界選手権(1962年)に出ることもあったって。国体の出来ないのは仕方が



思い出の一枚

チャップリンの主演映画「ライムライト」の曲にのせて演じた床運動。構成から曲の選択まですべて自分で考えた。

当時はコーチがいなかった時代。得点を出すためにはどうしたらいいか、床運動では構成から曲の選択まですべて自分で考えたという。ただ、一方ではママさんでもある。「子どもに右側のおっぱいを飲ませてから練習に行くと、左側のおっぱいが張っちゃう、なんていうこともあってね。ほんと、お笑いみたいだけど、とにかく夢中でした」

実家の母親に子どもを預け、練習の帰りに連れて帰るといふ毎日。「母が腰を痛めてしまったので、子どもと一緒に体育館へ行くことになって。当時は東京体育館のサブ体育館で練習していたんですが、あれ、いない、と思うと欄間を走っていたりね(笑)。彼女、甘栗が好きだったので、跳び箱の一番上をひっくり返して座らせて、むきかけの甘栗を渡して、遊ばせながら練習しました」さらに1963年には長男を出産。ローマ五輪の時点で、次は東京と決まっていたが、

「子どもを産むこととオリンピックとは別問題。でも、子育てがあったから成績が下がったと言われたくないから、子どもを産んで、子どもたちのおかげで頑張れたと言いたい。そう思ったらつらいなんていう気持ち

ちはどこかへ飛んでいっちゃった」

### 東京五輪に出られたから 今の私がある

五輪の最終選考会では、3種目を終えた時点で6位に滑り込み、見事五輪切符を手にした。そして、臨んだ東京五輪。今でも験の奥に焼き付いているのが、開会式だという。

「国立競技場に入れなかった皆さんが沿道の両側を埋め尽くして大歓声を送ってください……。その声を聴くだけでも胸がいっぱいなのに、競技場に入ると歓声がもっと大きくなってね。入場行進の時は涙があふれ出て、客席が見えませんでした」

自国での開催となれば、当然のことながらメダル獲得への期待が高まる。客席からの声援はそんなプレッシャーを忘れさせるほど大きく、そして暖かいものだったという。

「あの光景を見て、絶対にメダルを獲ろうねって。いかに失敗をなくするか、演技にどれだけ責任を持てるかを目標にしてきた練習の成果をすべて出そうとチームメイト皆で誓いあったんです」

結果、日本女子は団体で銅メダルを獲得。小野さんは個人総合で9位に入った。「私の人生は他道説なんです。つまり、自分がやりたいと思ってやったのではなく、たまたま目の前にそういうチャンスがあって、どうせやるのなら持っている力を全部出そうと、それが結果に結びついてくれた、そんな人生だったと思います。与えられたものは、何があっても責任をもってやり通す。もちろん、今もその気持ちは変わっていません」

現在、笹川スポーツ財団の理事長として活躍する小野さんだが、「健康であることは、心身ともに寂しくない人生を送れるということ。人間は、仲間と話せて、笑い合えて幸せになります。その一歩を1日の運動からスタートさせればいいんです。今、自分がこのような活動をしているのも、東京五輪に出られたから。あの経験があれば、今の自分もなかったかもしれませんね」



おのきよこ ● 1936年、秋田県生まれ。28歳の時、2児の母として出場した東京五輪において、体操女子団体総合で銅メダルを獲得。引退後は参議院議員となり、日本オリンピック委員会では初の女性委員も務めた。現在は(公財)笹川スポーツ財団理事長。日本オリンピック協会副会長。ご主人は五輪4大会で13個のメダルを獲得した小野橋さん。